



TITLE:

<大會抄録>北インド(ラージャスターン東南部)における都城(qasba)の形成過程:一六五〇-一八五〇

AUTHOR(S):

佐藤, 正哲

---

CITATION:

佐藤, 正哲. <大會抄録>北インド(ラージャスターン東南部)における都城(qasba)の形成過程:一六五〇-一八五〇. 東洋史研究 1992, 51(3): 517-518

ISSUE DATE:

1992-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154408>

RIGHT:

れた。繼いで三十一年に、江蘇省農民銀行が縣内第四區の鎮・村單位の調査を行なった。四〇年の滿鐵による無錫農村調査は、榮巷鎮に屬する小丁巷・鄭巷・楊木橋の三村であるが、このうち楊木橋は二九年の二二村の一つであり、三十一年の調査は榮巷鎮を含んでいる。残念ながら、二九年の調査は現在の所は殆ど利用できないため、報告では後者によって滿鐵の調査を相對化し、舊中國の農村經濟に關する若干の論點を提出したい。

### ティムール朝國制

安 藤 志 朗

ティムール朝の宮廷及びディーワーン機構の假說的再構成。インシャー作品の援用に基づく「國家」體制の枠組に關する假說の見解。これら二つの假説は、バイスングルの宮廷から傳わるミニアチュールの下繪一片のモチーフに如何なる解釋を要求するか。

### イスラム法の相傳について

—— 民事責任を例として

柳 橋 博 之

イスラム法の規定はしばしばカズイスティックであると言われ

る。つまり、イスラムの法學者は、主として個々の事案をいかにして解決するかに關心があり、理論化・體系化を怠っているというのである。

確かにイスラムの法學書において體系的な説明に出會うことは少ない。それは單に記述の體裁の問題ではなく、類似の事案が一見して異なつた解決を與えられ、しかも法學者自身が一貫した説明を與えられない場合が往々にしてあるということである。

そうなた理由は様々であるが、一つには、倫理的な動機のために個々の事案の解決の一部が放棄されたり、あるいは解決が繼承されながら、その原理が忘れられたりしたという事情も手傳つてゐる。

ここではこのことを、ハナフィー派とマールイク派における、民事責任の理論を例として檢證する。具體的には、第一に、引渡前に賣主の占有下で滅失した賣物に關する危険負擔と、第二に、侵奪者の許で滅失した物及びそこから侵奪者が享受した使用收益の補填の問題を採り上げる。

### 北インド(ラージャスターン東南部)における

#### 都城(qasba)の形成過程

—— 一六五〇～一八五〇 ——

佐 藤 正 哲

一七～一八世紀のこの地域の村は、その村域に關して、一方では

きわめて大きな村があるとともに、他方では小さな村があるという具合に、きわだった対照を示している。こうした村域の小さな村の多くは、大きな村の分村から次第に本村（新村）に成長し、あるいは當該の村からまたは鄰村から土地を得て、新村として形成されたか、あるいは新村を生み出すことによってみずからその村域を小さくした村であったと推定される。したがって、當時この地域の村は、もともとはその村域がかなり大きく、それもかなりルースに形成されたものと考えられる。

こうした大きな村のなかには、分村を生み出しつつも、次第に都城（カスバー）に成長してゆくものもあった。都城は、一般に郡都として當該の郡の行政の中心地であったが、同時にその地域における商工業の中心としての機能をも果たしていた。とりわけ、一八世紀後半以降に形成されてくる都城は、同時期に gani, mandi の語尾をもつ市場町や市場村の形成と同様に、まずもって商工業の中心地、市場町として出現するが、同時にこれまでの郡都にかわってしばしば行政上の機能をも果たすことになった。ここでは、そうした都城としてジャーラー・パターン（Jhalapatan）という都城を中心に、都城の形成過程を追究することにしたい。

## 一九二〇年代の「國粹」

——儒教再評價の視點——

森 紀子

一九二〇年代の中國思想界は、マルクス主義浸透の一方で、國學の希求が顕在化された時期でもある。二年四月、周作人は『國粹主義勃興の局面』として、『學衡』派と『朱謙之の古學』を指揮した。朱謙之は青年毛澤東に影響を与えたアナキストとして有名であるが、同年三月から『民鐸』誌上に獨特の『唯情哲學』を開陳する。天地萬物の本體は「情」であり、渾然天地萬物一體の「眞情之流」の哲學こそが孔家の眞面目であるとするこの唯情哲學は、彼がこれまで主張してきた虛無哲學を百八十度反轉させたものであり、その確立に多大の影響を与えたのが梁漱溟の『東西文化及其哲學』である。そもそも、新文化運動における傳統儒教への攻撃は、儒教の本質を「吃人禮教」と喝破してのものであった。非人間的な禮理に對する反撥は、當然、人性における情の解放を主張するのであり、その限りではこの情感哲學は、新文化運動の潮流にそうものといえる。ただ、梁、朱兩者は一轉、この情を儒教の本質とみなした。周易の「生々」をふまえた生命贊美の人生觀は、萬物一體の仁、現成良知を主張した明代の泰州學派との親近性を示しつつ、ベルグソンの生命哲學を換骨奪胎したものである。

新文化運動のスタンスからは、國粹主義とみなされた朱謙之と學衡派（新人文主義）は、歐米における近代への反省、反科學萬能主義の思潮を、バックに儒教を再認識したのである。